

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスペース

(宮古・大槌・釜石・障がい者センターかまいし・大船渡・米川・石巻・福島デスク・原町・もみの木・CTVC)

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

石巻ベースでは、昨年から、横浜教区の戸塚教会の信徒の皆様がボランティアとして、定期的に石巻ベースにきてくださるようになりました。昨年12月11日の月命日の日に、その中のお一人が石巻ベースで体験されたことを、生き生きと報告してくださいました。また、石巻ベースでは、1月に「新年会」のお餅つきと、「みんなで歌おう冬の歌」のイベントについて、記事を書いてくださいましたので、ご紹介いたします。

さらに、本号では、「福島ブロック会議」の際に、福島県内のベースと小教区のスタッフのために話された「復興公営住宅とそれが抱える2つの孤立」についての、公益財団法人トヨタ財団の本多史朗氏の講話をご紹介します。

カリタス石巻ベースのお茶っこに参加して

カトリック戸塚教会信徒 K

今日は12月11日、月命日の日。

お茶っこに参加して1ヵ月経ちました。行きは鈍行で7時間、川や紅葉の山をいくつも越え、どの木も重そうに実をつけた柿が青い空によく映えていました。石巻ベースに行くのは翌日で、仙台で1泊。仙台の街は大きく、駅の周りに渋谷、新宿、築地がぎゅっと集まったようでした。

次の朝、同行するAさんとの待ち合わせ時間まで朝市をのぞき、おでんの具を宅急便で送り、石巻ベースにガーベラを買いました。(後日おでんは家族に大好評！)

Aさんと仙台名物牛タンを食べ、仙石線で陸前山下に向かいました。電車から見た松島は、海にぼこぼこ丸い島が浮かび、反対には同じような丸い低い山が並んでいました。私の実家は信州で、天を突くようなとんがった山ばかりなので心惹かれました。

途中、まだ造成中で大きな重機が入っているところや、新築の街があり、4年経ってもまだ道半ばのようです。

石巻ベースでは、スタッフが忙しそうに活動されていて、私たちも荷物を置いてすぐにオープンスペースに参加しました。

オープンスペースを利用している住民の方々は、編み物、クラフトをしながらおしゃべりをしたり、スタッフと話し込んだり、それぞれ過ごしています。ブローチを教えてもらいましたが、不器用さを笑われて、結局出来上がっていたものももらいました。

話の中で「ぴーちゃんになったから・・・」など「ぴーちゃん」が何度も出てくるので聞けば、ひいおばあちゃんが「ぴーちゃん」とのこと。なんともかわいい言葉です。

ベースでの生活は、朝は6時半に起きて坂を上ったところにある赤い屋根の小さな石巻教会でミサにあずかり、朝食、ミーティング、掃除、仮設のお茶っこに行き、お茶のセッティング、みなさんの様子を見ながら話に参加、片付けてベースに帰り、一日の振り返り、夕食、片付け、自由時間(近くのお風呂に行きました)。

仮設住宅は、周りに何もなくて灰色の建物は収容所のような感じでした。

スタッフのシスターの話では、4年経ってぼつりぼつりと当日の話をすることが出てきたとのこと。お茶っこの中でも世間話で笑っている間に、4日間電柱にしがみついていたというおじいさん、ずぶぬれでお寺の下で毛布にくるまっていた、電車で被災し、しばらくしてから避難所に行くと既に段ボールで仕切られ知り合いもおらず、親戚を頼って行くと「生きていたの！」とみんなに言われたという女性。耳が遠い男性を「この人は奥さんを亡くしてしまったから耳も悪くなるさ。でも見つかって良かったんだよ。俺はまだ見つかっていない」と教えてくれる人。また、海岸近くには公園を造る計画があるけれどあそこにはまだ見つかっていない人がいるとのこと。

2日目には、被災し、奥さんを亡くされたTさんに午前中お話を伺い、午後にはご自宅のあった場所、避難した道筋を案内していただき、今住んでいらっしゃる復興住宅のマンションにお邪魔しました。

避難所の窓から外を見ると、家ごと流れる中に知り合いの女性が手を振っていた、遠くに見える火を頼りに女性2人を励ましながら避難した、ずぶぬれのまま夜を明かすことになり低体温症になる人も多く、みんなで夜が明けるまで必死に声をかけ、体をさすり続けた。

「報道されることはなかったけれど」と1枚の写真を見せてくれました。それは泥だらけになった若いお母さんが泥だらけの子どもの亡骸を抱いている写真でした。「こういうことがいっぱいあった」とおっしゃっていました。



震災時の様子などを話して下さる語り部のTさん(中央)

Tさんの家の窓からは、住んでいた家と避難した会館の跡地が見えその向こうは海が広がっていました。朝夕そちらに向かって奥さんに声をかけるそうです。

帰る日、シスターが「この辺はこれから海の風が強くてほんとに寒くなるのよ」とおっしゃっていました。

3日間たくさんのお話を伺いました。初めは話に入れるのかと心配でしたが、ケーキ隊の皆さんの「ケーキが嬉しい」とどこでも言われたのが話すきっかけとなりました。ありがとうございます。

でもお聞きするだけで何もできません。帰ってからどうだったと聞かれましたが、話すことができません。お茶っこで出会った人、ひとりひとりの顔が浮かんできます。

会う人会う人身近な人が亡くなっているという経験は初めてでした。一瞬の選択が助かる、助からないという分かれ道になっていた、4年経って立ち上がり、前に行く人まだ動けない人。

ベース長が、もともと家族の基盤が弱かった家はその問題が表面に出てきているとおっしゃっていました。この支援も期限があるようですが、また新しい場所で知らない人と1から生活をしなければならぬ不安の中、この場所がなくなってしまったらどうなるのかと思います。

この地震の後にも世界で国内で災害などがありました。早く安心できる生活がその方たちのもとに訪れますようにと祈ります。そしてお茶っこで出会った人は、たくさん生か死の狭間を体験して生きてくれたから会うことができた人たちなんだと思います。会えて良かったです。

お茶っこに参加する機会を与えてくださった皆さんに感謝します。

1月、2月オープンスペースイベント開催 新年会&みんなで歌おう冬の歌

カリタス石巻ベース

1月16日(土) 新年会

石巻では雪が降り積もりましたが、午前11時から石巻ベースにて、新年会「餅つき」を行いました。

餅つきが始まる前に、参加される方が、万が一、雪で転んでは大変だと、ベースの周りを男性陣が雪かきをしてくれました。



経験豊富な地元の賄スタッフの協力もいただき、着々と準備が進み、いざ、餅つき開始！餅つきが始まると皆さんの視線は、一気に餅つきをする方へと向きました。順番に臼と杵でお餅をついていただき、順調に餅がつきあがっていきました。

特に子供たちは、餅つきに興味津々。身を乗り出してじーっと様子を見ていました。子どもたちにも順番で、大人の補助を受けて杵で餅をついてもらい、良い経験の場となりました。

つきたての餅は、参加された方々に振る舞い、皆さん、雑煮やあんこ、ずんだ、きなこなどでいただきました。お味は「美味しい」一言です。

今回の参加者は、大人30名、子ども5名。ベースに初めて来られた方がいたり、テーブルで話が盛んになるところもあり、「食」を通して、とても良い交流の場になりました。来年も開催できたらと思います。

餅つきに夢中の子どもたち♪



2月17日(水)「みんなで歌おう 冬の歌」

昨年10月に行った秋の歌に続き、今回は「冬の歌」を歌って、みんなでおにぎりや豚汁を食べるといったイベントを開催しました。

朝から、おにぎりや豚汁を作り、会場を設定。何人参加して下さるかなあ～と思いながら、準備を進めていきました。

今回の参加者は、約30名と前回より多い人数となりました。皆さん、上手に歌を歌っておられました。雛飾りがあったこともあり、最後は「うれしいひなまつり」を歌いました。

歌の後は、お食事タイム。「みんなで食べるとおいしいねえ」という声が聞かれました。お食事が終わっても、テーブルごとに懇談を楽しまれました。

次回は、「みんなで歌おう 春の歌」を計画出来たらと思っています。



みんなで一緒に歌って、同じものを食べて、楽しめました♪



復興公営住宅とは何か、そしてそれが抱える2つの孤立

1月28日、第15回福島ブロック会議がカトリック郡山教会で開催されました。今回のブロック会議では、公益財団法人トヨタ財団 東日本大震災特定課題担当の本多史朗様に、「復興公営住宅とは何か、そしてそれが抱える2つの孤立と取組」と題して、講演していただきました。

今回は、そのお話しの中で、復興公営住宅とそれが抱える2つの孤立について、お聞きしたことをお伝えしたいと思います。

復興(災害)公営住宅とは何か？

復興(災害)公営住宅とは、被災者の方々を受け入れるため、国費で作られる公営住宅のことで、以下のような特徴があります。

- 《構造》 ほとんどは、鉄筋コンクリート造りの集合住宅。
- 《立地》 海岸沿いからは奥まった山間部(交通の便が悪い)に作られることが多い。
- 《入居者》 入居者の4～5割が65歳以上の高齢者。
入居者の1～2割が経済的にひっ迫している。



詳しい資料とともに分かりやすくお話して下さった本多史朗様

復興(災害)公営住宅は、被災者の方々の受け入れを急ぐ結果、建物を作ることに意識が集中してしまい、空間について配慮されていないのが現状です。被災者の終の棲家となるはずの住宅ですが、仙台市のような大都市にある復興(災害)公営住宅を除けば、交通の便は悪く、急ごしらえのものが多くあります。また、経済的な力のある層や若い層は一戸建て住宅を自力再建することを選ぶため、復興(災害)公営住宅には入居してこないという点も特徴となっています。

※復興公営住宅、災害公営住宅という呼び方について

岩手県、宮城県では、復興公営住宅と災害公営住宅という呼び方をいい加減に混在して使用されている。しかし、福島県では、原子力被災者が対象の県営住宅のことを復興公営住宅と呼び、津波被災者を対象とする市営住宅を災害公営住宅と呼び、はっきり区分されている。

※復興公営住宅及び災害公営住宅の整備状況(平成28年1月末)

	計画戸数	完成戸数	進捗率
岩手県:	2,987戸	1,337戸	44.8%
宮城県:	15,917戸	8,077戸	50.7%
福島県・災害公営住宅(地震、津波等被災者向け)	2,807戸	2,212戸	78.8%
復興公営住宅(原子力災害による避難者向け)	4,890戸	1,005戸	20.6%

復興公営住宅が抱える問題

復興公営住宅が抱える問題は、一言で言えば、「孤立」。その「孤立」には、「内側での孤立」と「外からの孤立」という2つの面があります。

内側での孤立

まず、発災前の被災者の暮らしについておさえていただきたいと思えます。発災前、被災者のほとんどの方々が、地縁を中心とした地域の中で暮らしていました。このような地域には、①人の移動が比較的少ないために、人間関係は数世代にわたって安定している、②冠婚葬祭を中心とした慣習や不文律（言葉として明快に表現する必要がないこと）が定まっている、という特徴があります。

今回、東日本大震災と津波が、地縁を中心とした地域を直撃し、住んでいた被災者の方々は、その時点から、避難所に移り、応急仮設住宅へと移っていきました。そして、最後に復興公営住宅に入居されるわけです。

しかし、その過程で被災者の方々の人間関係は、いくつもの面で壊れていきます。例えば、①津波で家族を失う ②近所の人たちとは別々の応急仮設住宅に入り、離ればなれになる ③復興公営住宅に入居する時には、抽選を経るので、入居してもだれも知り合いがないということです。

このような理由から、復興公営住宅におけるコミュニティづくりが重要なテーマになります。ところが、復興公営住宅は、人間関係を作るにはおよそ不向きな場所となっています。その理由は、大きく3つあります。

①《環境》コンクリートとむき出しの土を中心とした無機質な空間
集合住宅の建物はありますが、その敷地の中や周りに寛いで話をするようなスペースや設備、さらに、日光や風を遮るような緑や、心を和ませるような花など何もないのです。

②《立地》人間関係を作るための場所がない
仙台のような都市部には、集合住宅であっても、その周囲にコーヒーチェーン店やファミレス、更には居酒屋のような、人間関係を作るための場がいくつもあります。ところが、沿岸部には、元からこのような外食文化が少ないため、復興公営住宅から最寄りの居酒屋などの店へ行こうとすると、最短で数km、場合によっては十数kmも移動しなければならないのです。

③《費用負担》集会所と共益費
多くの復興公営住宅には、人間関係づくりを促す目的で、集会所が併設してあります。しかし、集会所を使用する際には当然ですが、電気代やガス代といった光熱費がかかります。この光熱費をはじめとした復興公営住宅全体に関わる経費、つまり共益費は、入居者の方々が頭割りで負担しなければなりません。だいたい一戸当たり月額3~4千円となりますが、一定の数の入居者の方々は、この共益費の負担を好みません。

その理由として、復興公営住宅の家賃には、収入等により減免措置がありますが、共益費にはないため、一定の入居者は共益費の負担感を重く感じやすいのです。

また、沿岸部では、ほとんどの被災者はこれまで一戸建の住宅に住み、そこでの暮らしのみを知っています。そのため、集合住宅や共益費といったもの自体、なじみにくいのです。

このような理由から、共益費の負担を好まない入居者の方がいると、集会所を活発に利用することがどうしても難しくなり、集会所で人間関係づくりのイベントなどを行っている、「共益費が増えるので、やめてほしい」という声が挙がります。

これらの結果として、復興公営住宅の中の人間関係づくりは、何も手を打たないでいると、入居者とその両隣以上には進みません。入居して1年間たっても、全く人間関係ができない、あるいは悪化する一方になるという事例もしばしばです。

～人間関係を作りやすいのは、応急仮設住宅～

応急仮設住宅は、プレハブ造りのまさに応急住宅で、外部の寒暖の差が室内の温度にすぐに影響を与え、壁が薄いため、隣室の音がすぐ

に聞こえるという、住環境としては好ましいものではありません。しかし、人間関係を作る点では、復興公営住宅よりも向いています。

その理由に、まず、低層住宅という点が挙げられます。高層住宅の復興公営住宅が持つ、威圧感というものはありません。また、住宅の周囲に、ベンチや花壇を作ることが自由です。更に、洗濯物を窓の外に干すため、洗濯物を干したり取り込むとき、顔を合わせると、自然に入居者同士がお喋りを始め、そのうちにベンチに座り込んで、話が弾みます。そのような光景を応急仮設住宅ではよく見かけます。集会所の光熱費も、行政が負担するので、入居者の方々は、気楽に集会所を使えます。応急仮設住宅には、昔の長屋的な人間関係があるのです。

復興公営住宅



応急仮設住宅



Copyright ©2016 The Toyota Foundation All Rights Reserved.

左：芝生などの緑や遮蔽物もない復興公営住宅の団地敷地（福島県）

右：低層住宅で、周囲にベンチや花壇を作ることが比較的自由的な応急仮設住宅（岩手県）

外からの孤立

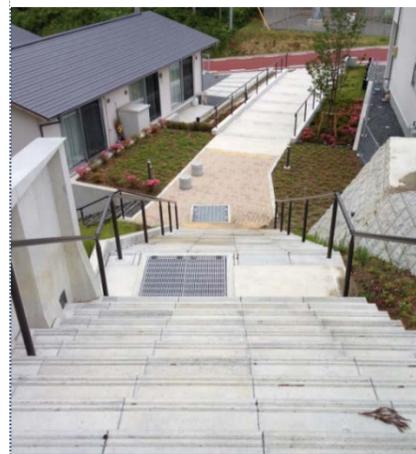
外からの孤立という問題の本質は何でしょうか？それは、見えない距離の壁です。復興公営住宅と最寄りの生活インフラの間の距離が、遠いのです。生活インフラと復興公営住宅の間の距離が、これだけ開いてしまう最も大きな理由は、東日本大震災の際の津波そのものです。

そもそも沿岸部には、平地が猫の額位しかありません。（仙台平野は例外。）利用可能な平地のほとんどが、津波の被害を受け、危険地域に指定されたため、内陸部に引っ込まなければなりません。しかし、その内陸部にも利用可能な土地がほとんどなく、山間を切り開き、土地を造成して、復興公営住宅を建築するしか選択の余地がないのです。しかし、そのような山間の土地は、人里から離れていることが多いのです。

また、ややこしい問題がいくつか隠れています。まず、「坂」の問題です。山間に造成した復興公営住宅に出入りをするためには、きつい坂を上り下りする必要があります。そのため、自動車でも移動しない限り、入居者はどうしても引きこもりがちとなってきます。しかし、復興公営住宅の入居者の高齢者比率は高く、すでに、今でも自動車の運転が難しくなった方をお見かけします。これから年を追うごとに、そのような高齢者の方の比率は上がっていきます。

また、全ての生活インフラの中で、復興公営住宅に最も近い距離にあるのが、コンビニです。復興公営住宅の入居者の暮らしが、コンビニ頼みになっていることを、はっきり示しています。コンビニに頼るような食生活がどのようなものであり、それが近い将来、健康面でも、経済面でも、どのような事を引き起こすのか想像していただければと思います。

復興公営住宅の入口（宮城県）



Copyright ©2016 The Toyota Foundation All Rights Reserved.